

= 忘れない・・・ =

昭和20年8月9日11時02分、長崎に投下された原爆は一瞬にして多くの命を奪っていった。その「長崎原爆の日」の前日となる8月8日に長崎市で行われたKAKKIN長崎全国平和集会に出席してきた。オープニングセレモニーでは長崎中学の生徒によるハンドベルの演奏。曲目は、クスノキ、長崎の鐘、千羽鶴。クスノキ？恥ずかしながら長崎出身の福山雅治さん作詞・作曲の曲とも知らなかったが、少女たちが奏でるハンドベルの音色に目が潤んだ。なぜだろう？長崎という場所柄か、平和集会という場面構成からか、いや、人々の命も家もすべて灰と化す戦争、それを伝え聞いた日本人の心の奥底に響くものがあるからなのだろう。平和や命の尊さをあらためて感じた一日となった。

命の教育というお話を聞いたことがある。僧侶が小学校6年生の授業で、「あなたの命を鉛筆の長さに例えると今どのくらいと思いますか」の問いに、男の子が人生80年だからまだ7分の1くらいと答え、多くの生徒が賛同した。するとある少女が、「分かりません。だって、明日死ぬかもしれないし、今が鉛筆のどこか分からない…」僧侶は、「そうですね、どちらも正しいと思います」そして、少女の答えに「すごいですね、だからこそ、今日・一日を大切に生きるという仏の教えもあるのですよ」と褒めたという。

命にまつわる話を今一つ。これは、自らの経験としてお話しする辛い話だが、2014年8月31日、三度目の東京・基幹労連に赴任する時のこと。私の出身部で副支部長を経験し職制となった後輩がいた。係長会の会長を務めるなど、これからを担う有能な管理者であったが、胆管がんが発見され手の施しようのない状態となってホスピス病院に入院したとの報が入った。しかし、職場も本人の意向に気を遣い、私の上京ギリギリまで、どこに入院しているかを教えてくれなかった。「もう明日東京に行かないかんのよ、何とか調べてくれっ」と青年部時代のもう一人の後輩に頼み込み、東京に発つその日、何とか間に合った。

奥様の気配りで二人になった病室、久々に見た後輩は少し痩せ、痛みも熱も出るのだろう、ほんのり赤い顔をしていた。末期がんの後輩の手を握り、「熱いのう、Tや、痛いかな？」「ああ痛てえ」、たぶん家族の前では口にしていない言葉だったろう。「痛いわの～。じゃけんど、きついやろうが、一日でん長くそん姿を奥さんと子供たちに見せなの、がんばらな」「わかっちょる。神田さんもまた東京やな、すごい仕事やな、みんな期待しちょるき、頑張りよえ」彼との最期の会話。決して涙を見せまいと自分に言い聞かせ強気で会いに行ったが、そんな状態で私への気遣い…、もっと優しい言葉をかけてやればよかった。

基幹労連着任の数週間後、息を引き取ったとの連絡が入った。残された奥様、息子さんと娘さんの悲しみ、そして、何より本人の無念さは想像すらできない。だが、敢えて、Tの頑張りを言わせてもらえば、抗がん剤投与で意識を失うより、自分の命の灯が見える間に愛する家族との別れ、いろんな思い出を整理したかったがためにホスピスを選んだのだろう。あれから4年、いつもそう思って冥福を祈っている。

今回、命の尊さと別れの辛さをしつこいくらいに取り上げた。それは今年11人もの尊い命が失われているということ、その方々にはそれぞれの人生があったということ私たちの心に今一度刻み、第9期後半年をスタートしたいとの思いからである。死亡災害は、家族との別れもできず、何も告げられず、突然命を奪われ・失う、痛ましいものである。

まず安全、労働運動の基軸として取り組んでいこう。

ご安全に

2018年9月3日
日本基幹産業労働組合連合会
中央執行委員長 神田 健一